



「伝道は小さな 祈りの部屋から」

日本福音基督教団
成城キリスト教会 牧師

白田尚樹

三浦綾子氏は著書「小さな一歩から」(講談社)の中で、アウシュビッツ収容所のコルベ神父、洞爺丸台風で命をささげた二人の宣教師、そして塩狩峠の長野政雄のことを述べている。綾子氏の姉が、「わたしたちは、なかなか命は捧げられないけれど、小さなものなら、捧げられるのではないかしら」と語る。それに応じて、「どんなに忙しくても、一日に10分の時間を誰かのために割くことはできないかと思ったのだ。……その人のために祈るだけでもいい。要は小さな一歩から始め得るのではなかろうか、と。」(p.189)

「伝道は小さな祈りの部屋から」始まる。イエスの伝道生涯には隠された多くの「小さな祈り」があった。「いつものように、いつもの場所で」祈られた場所は「ゲッセマネの園」である。イエスの公生涯を築き上げたのは「祈り」であった。表舞台に現れる救いのみわぎの土台には「祈り」が積み重ねられていたことを見落としてはならない。そしてイエスの「祈り」が「十字架」という永遠の救いのみわぎを完成させたのである。それは「復活」

においても然りである。

福音書から使徒の働きに移行する際にも同じ事が起きている。「彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。……彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。……百二十人ほどの人々が一つになっていた。」(使徒1:13-15) イエスの昇天後、弟子たちは「上の部屋」で祈り続けた。そしてペンテコステ(聖霊降臨日)を迎える。ペンテコステはこの10日間の祈りがあったからこそ成就したとも言える。決して自動的に聖霊が降臨したのではない。神のご計画によって、主イエスを信じて聖霊を祈り求める一人ひとりに聖霊なる御方は降臨したのである。

今でも聖霊を受けるためには祈りが求められる。そして、イエスは息を吹きかけてまで言われた。「聖霊を受けなさい」(ヨハネ20:22)と。「東京プレーヤーセンター」とは現代の日本の伝道を担う「祈りの家」なのである。

TPCの活動目的

- (1) 超教派として活動する。
- (2) 毎日、礼拝を捧げ、祈り会を行う。
- (3) 閉塞感のある日本のキリスト教会に元気を与える。
- (4) 伝道、学びなどのために貸室を提供する。